

辺戸ストーリーブック

見上げれば神宿る山  
麓に息づく辺戸の暮らし

Ver. 1.0

やんばる国立公園インタープリテーション全体計画 国頭村編



# 目次

1	このストーリーブックについて	P01
2	辺戸歴史絵巻(年表)	P04
3	辺戸周辺マップ	P06
4	辺戸の魅力を伝えるストーリー	P08
	4-1 石灰岩の地層	
	4-2 森と生物	
	4-3 神話の地	
	4-4 伝承から歴史へ	
	4-5 暮らしのための祈り	
	4-6 近代以降の辺戸	
	4-7 自然に抱かれた暮らし	
5	辺戸エリアで体験してほしいこと	P24
6	地域の情報リスト	P25
7	参考文献	P26
8	あとがき	P27

# 第1章

## 1-1

### このストーリーブックについて

このストーリーブックは、沖縄島(沖縄本島)の最北にある辺戸周辺エリアの魅力や価値を整理し、地域を来訪する方と共有することを目的として作りました。

来訪者を受け入れ、地域の価値を伝えていく側の方々(行政やビジターセンター、エコツアーガイド、宿泊施設や飲食店・土産物店などの観光事業者、地域住民の皆さん)に向けて、ツアープログラムや配布物の作成、商品開発等を行う際に、地域の自然や歴史文化などの伝え方のベースとして活用していただくことを想定しています。また、観光関連の人材育成や若い世代、移住を希望する人などに向けて、地域を理解し学ぶ教材としても活用できます。

地域を訪れる方にとっては、この地域ならではの魅力や価値をより深く知り、味わうためのきっかけとして使っていただければと思います。

自然環境を含めた地域の状況も来訪者層も年々変化しますので、このストーリーブックに完成版はありません。地域の皆様が主体となって、情報を更新・改訂し、進化させていくことを計画しています。

## 1-2

このストーリーブックについて

# ストーリーブックのつくり方

3村全体編、各村別編ともに公開ワークショップを開催し、ワークショップでの意見を大切に、日本インタープリテーション協会の監修のもと作成しました。

各村別編は、各エリアの行政、観光協会、事業者の方々が参画する「地域チーム」で議論を重ねました。

POINT  
01

### 地域の皆さんとつくる

地域の皆さんが集まって3回のワークショップを開催し、地域の魅力や価値について多様な視点での意見を出し合いました。

POINT  
02

### ストーリーをつくる

ワークショップの話から浮かび上がったストーリーを抽出し、主題となる文とその解説文を、過度に専門的にならないよう平易な言葉で整理しました。

POINT  
03

### ストーリーブックをつくる

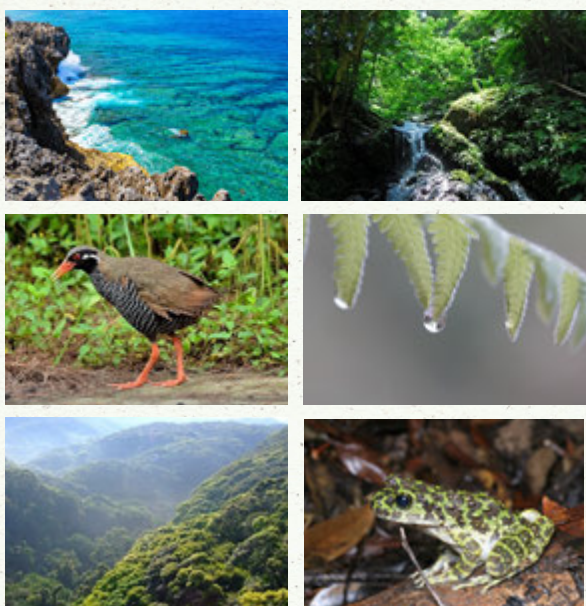
ワークショップ参加者の中から、有志の皆さんの協力をいただき、「国頭地域チーム」としてストーリーの練り直しを行い、ストーリーブックの構成や内容を考えました。

# 1-3

このストーリーブックについて

## 「インタープリテーション」と 「インタープリテーション全体計画」

インタープリテーションとは、自然・歴史・文化・暮らしなど、その地域が本来もつ”意味”や”価値”を来訪者と共有し、理解を深めるためのコミュニケーション手法です。インタープリテーションは単に情報を伝えるのではなく、そこに含まれるストーリーを浮かび上がらせ、それを体験を通して感じ取ることで、来訪者に共感や驚きを与え、来訪者自身の価値観や経験と結びつけられるように導くことを目指します。インタープリテーションは観光・環境保全・教育・地域づくりなど幅広い場面で活用でき、地域の魅力をより深く伝えるための”体験のデザイン”ともいえる手法です。

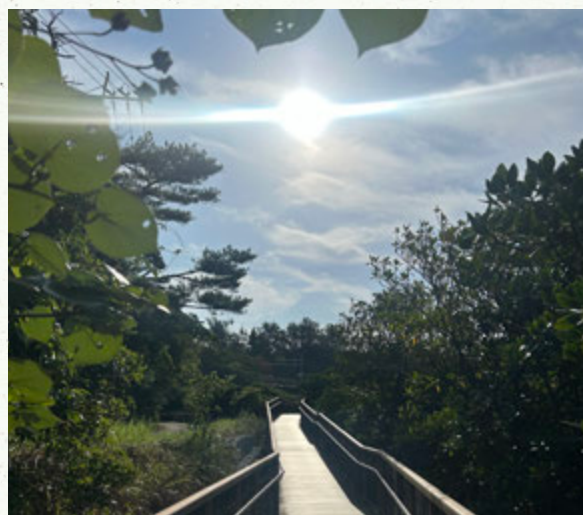


### インタープリテーション 全体計画

インタープリテーションは、ガイドプログラムはもちろん、案内板や掲示物、配布物、インターネットに載せる情報やお土産物など、様々な媒体に関係します。それらを作る際に、軸となるテーマやストーリーを整理し、何をどのように伝えるのかを包括的にまとめた”伝え方の設計図”がインタープリテーション全体計画です。

### 全体計画の活用と更新

全体計画によって、対象地域の行政、観光事業者、地域住民など多様な主体が共通の視点を持って地域の価値を伝え、テーマやストーリーに基づく来訪者体験を提案できるようになります。さらに、全体計画を地域が自ら更新し育てていくことで、関係者それぞれの地域への理解がより深まっていきます。



# 1-4

このストーリーブックについて

## やんばる全体編と各村編について

やんばる国立公園インタープリテーション全体計画は、やんばる全体編、国頭村編、大宜味村編、東村編の別編から構成しています。



### やんばる国立公園インタープリテーション全体計画 (やんばる全体編)

#### 人と自然がつなぐやんばる未来日記

やんばる3村全域に共通する自然・文化・歴史の価値・魅力を集めたストーリーブックです。



### 国頭村編

#### 見上げれば神宿る山 麓に息づく辺戸の暮らし

辺戸周辺エリアの魅力、特に琉球創世神話につながる祈りの文化と歴史を深掘りできるストーリーブックです。



### 大宜味村編

#### おばーとおじーのしま語り

大兼久集落の魅力、特に人のつながりの生き生きとした豊かさを味わうことができるストーリーブックです。



### 東村編

#### 今日もアガリティーダ日和 ～あたりまえが宝物～

東村の魅力、特に人の暮らし、産業の歴史が自然とともにあることを感じられるストーリーブックです。

各編の最新版はコチラより  
ダウンロードできます。



# 第2章 辺戸歴史絵巻

## 星窪伝説

昔、辺戸に隕石が落ちていたかもしれない

## 隆起石灰岩の岩山・安須森

岩山一帯は2億5千万年前の地層

## 宇佐浜遺跡

3千～2千5百年前に人が暮らしていた土地の記憶

## 琉球開闢伝説

琉球の創世神アマミクがまず一番に創ったとされる



## お水取り

首里からの使者が辺戸大川で若水を汲み、王府で新年の清めの儀式に用いる

## 13世紀

### 義本王の伝承

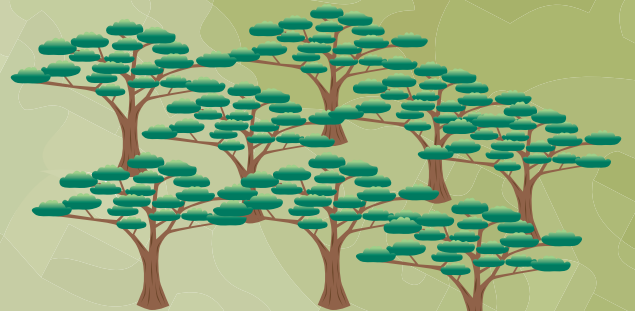
琉球国第三代の国王・義本が辺戸に逃れて没したとされる



## 18世紀

### 蔡温松

琉球国の三司官・蔡温が防風林・抱護林として各地に植林を奨励した



## 1912

### 「戻る道」掘削事業

宜名真と辺戸を結ぶ道が切り開かれた



1945

## 沖縄戦

米軍が安須森の頂上に  
一部平場を造成した



1950-1966頃

## 辺戸上原の開拓事業

ダムと水路橋と発電所、集落移転の一大計画



1950-1966頃

## 祖国復帰運動

海をまたいで絆を確かめ合った

1960-1970頃

## 安須森で石灰岩採取

開拓事業のため、採石場として岩山が採掘された

1965

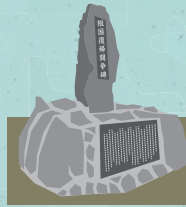
## 沖縄海岸政府立公園 指定

琉球政府により、辺戸岬周辺までの  
海岸線が指定された

1972

## 本土復帰

祖国復帰闘争碑にその思いを刻む



1972

## 沖縄海岸国定公園 指定

政府立公園が復帰に伴い  
国定公園となった

1981

## ヤンバルクイナ発見

国頭村で発見された鳥が新種記載された

1996

## ヤンバルクイナ展望台 整備

辺戸岬と宇座浜、安須森の山の眺望が素晴らしい



2002

## 安須森に観光施設(現・アスムイハイクス)

安須森を保全しその魅力発信を目指す



2016

## やんばる国立公園指定

亜熱帯の森とそこに接する海岸線の環境を守る

2019

## 辺戸岬観光案内所整備

年間40万人が訪れる沖縄島最北の案内所



2025

## アマクヌムイ・辺戸ノ安須森 名勝指定

アマクヌムイ(アマクノ杜)13の御嶽の1つ



# 第3章

## 辺戸周辺エリアマップ



※掲載地点であっても、立ち入りが制限される場合がありますのでご注意ください。

# 第4章

## 辺戸の魅力を 伝えるストーリー



- 4-1 石灰岩の地層
- 4-2 森と生物
- 4-3 神話の地
- 4-4 伝承から歴史へ
- 4-5 暮らしのための祈り
- 4-6 近代以降の辺戸
- 4-7 自然に抱かれた暮らし

## 4-1

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 石灰岩の地層

辺戸にそびえる安須森(アスムイ)の岩山は、  
2億5千万年という太古の歴史の証人であり、昔も今も  
沖縄島の北の玄関口を示すランドマークだ。



## 太古の地層が露出した岩山

辺戸の集落を見守るようにそびえる岩山、安須森(アスムイ、辺戸岳)。これは、日本の本州からつながる石灰岩の地層が隆起した場所です。安須森の地層はとても古く、2億5千万年前の地層が2億年前の地層の上に乗っています。古代のサンゴ礁の地層がより新しい地層に押し上げられるように隆起し、やがて侵食を受けカルスト地形を作

りました。東側に絶壁を見せ西側に傾斜する安須森の岩山独特の地形、そして海から20mの崖の辺戸岬や80mもの断崖の茅打バンタの絶景は、こうしたダイナミックな地球の動きを感じることのできる場所、そして古代のサンゴ礁と現代のサンゴ礁とが、時空を超えて出会う場所なのです。

## 北の玄関口、辺戸

北東から南西へ伸びる沖縄島は直線距離で106km。辺戸はその最北にある集落で、沖縄島の北の玄関口です。特徴的な安須森の山は、遠く沖永良部島からも目視でき、北から船で沖縄にやって来る人々にとってのランドマークです。

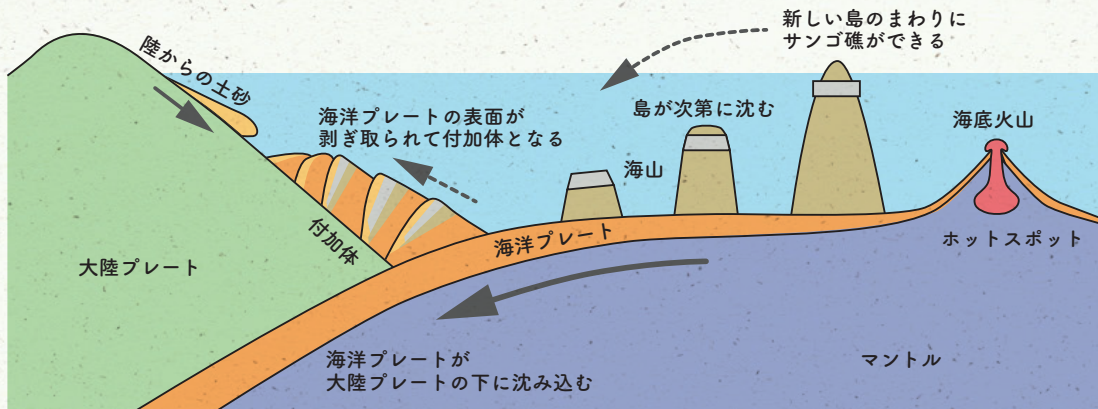
辺戸岬を回り込んだ東海岸の宇座浜(宇佐浜)の海岸段丘には、国指定史跡「宇佐浜遺跡」があります。宇佐浜遺跡は日本の縄文時代晩期に相当し、約3,000～2,500年前頃の遺跡であるとされています。



### 安須森を作った「付加体」

日本列島や南西諸島の太平洋側には深い海溝があり、大陸プレートの下に海洋プレートが沈み込んでいます。この時、海洋プレートの表面が剥ぎ取られて大陸プレートの縁に張り付く「付加体」が生じます。これを繰り返すと、古い地層の下に新しい

地層が潜り込むという逆転現象が起こります。沖縄島北部に見られる付加体の地層の中では、特に古い石灰岩の地層が、国頭村の辺戸と半地、また大宜味村と本部半島の一部に見られます。



## 4-2

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 森と生物

固有種を多く育む多様性豊かなやんばるの中で、  
辺戸を包み込む森は、石灰岩地特有の植生と  
独特の自然景観をもたらしている。



## 石灰岩に育まれる森

やんばる地域の多くに見られるイタジイやイジュの森。これは国頭マージという赤土の酸性土壌のエリアに広がります。一方、辺戸岬周辺は古い石灰岩の地層が露出したアルカリ性土壌です。そのため、辺戸岬や安須森の山にはソテツが群落をつくり、ガジュマルの巨木が育つ独特の植生と景観が作られました。

辺戸岬周辺は古い石灰岩の地層が露出したアルカリ性土壌です。そのため、辺戸岬や安須森の

山にはソテツが群落をつくり、ガジュマルの巨木が育つ独特の植生と景観が作られました。ガジュマルやアコウの木は石灰岩の岩をも割りながら根を伸ばし、カルシウム豊富な土壌を好む陸生貝類が岩陰に潜んでいます。



## 身近に暮らす固有種

辺戸の集落では、ケナガネズミが家の中に入って来たり、公民館放送に合わせてヤンバルクイナが鳴き交わす声が聞こえたりと、固有種がとても身近な存在です。



ノグチゲラ

国の特別天然記念物、絶滅危惧IA類



ヤンバルクイナ

国の天然記念物、絶滅危惧IA類



ホントウアカヒゲ

国の天然記念物、絶滅危惧IB類



ケナガネズミ

国の天然記念物、絶滅危惧IB類



リュウキュウヤマガメ

国の天然記念物、絶滅危惧II類



ヤンバルテナゴコガネ

国の天然記念物、絶滅危惧IB類

## 生き物も渡る道

集落周辺の道路にはケナガネズミやヤンバルクイナに対する注意喚起の道路標識があります。車の運転の際はスピードを落とし、生きものに出会えるかもしれない森をゆっくりと楽しんでください。



## 固有種のことを知ろう！

やんばるには多くの固有種があり、国や県の天然記念物に指定されています。やんばる世界遺産センター（R8年夏オープン予定）環境省やんばる野生生物保護センターウフギー自然館のサイトで生きものたちが紹介されているので、ぜひチェックしてみてください。



※R8年夏オープン予定

## 4-3

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 神話の地

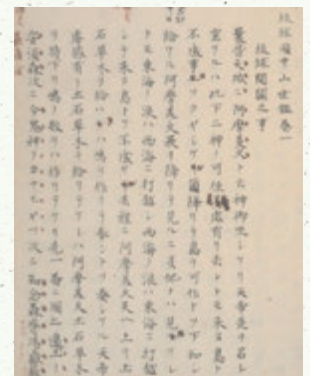
琉球の創世神話の地である安須森は、  
辺戸と首里の琉球国をつなげる『始まりの記憶』であり、  
昔も今も人々の心の拠り所となっている。



かいびやく

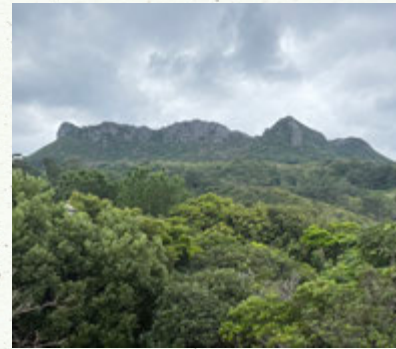
## 琉球の開闢神話

琉球国初の歴史書『中山世鑑』(1650年)巻一の冒頭に置かれた「琉球開闢之事」。これによると、創世神・阿摩美久(アマミク)が天帝の命を受け天城より下界に降り立ち、島々を創り、御嶽(ウタキ)を開きました。その中でまず初めにつくられたのが辺戸の安須森御嶽です。琉球の最高位の聖地として、天意と琉球国を結び、国の繁栄・安寧を祈る場所なのです。



あ す むい  
安須森御嶽

安須森御嶽(辺戸御嶽)はあしむり、黄金森、ウネーガラシ(羽を広げる鳥)とも呼ばれ、四つの岩の峰が弧を描くように聳えます。頂上部は南から順にシノクセ嶽、アフリ嶽、シチャラ嶽、イヘヤ嶽と呼ばれる神様の場所です。この上に登るのは「神様の頭を踏みつける」ことになるため、昔から人は登らず、拝みの際には中腹から頂上に向けて祈る「遥拝(ウトゥーシ:お通し)」が行われてきました。辺戸の集落のどこからでも仰ぎ見ることのできるこの岩山は、地域の人々の心の拠り所です。



ふし くぶ  
星窪伝説

辺戸には隕石が落ちていたかもしれません。歴史書『球陽』(1745年)外巻の説話集『遺老説伝』巻一には、昔々、辺戸の北にある宇座原地に星が落ちてきて窪地ができという「星窪(ふしくぶ)」伝説があります。大きさは長さ十間、幅五間(約18m×9m)、深さ七尺(約2m)の窪地と書かれています。昭和55(1980)年、北国小学校の小学5年生がこの場所を調べた記録もありますが、現在、その位置には道路が通され、地形を確認することはできません。辺戸と宇宙をつなげるロマンを感じる言い伝えです。



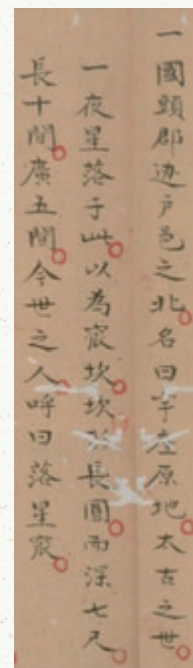
北国小5年生の記録より

琉球の歴史資料

沖縄は、かつて沖縄戦を経験した影響で歴史的な建造物や貴重な文化遺産のほとんどが失われてしまいました。その中で、琉球の歴史や古来の文化を知る主な資料としては、古い順に次のものが遺されています。

これらは琉球大学の「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」や、国立国会図書館の「デジタルコレクション」などで、また琉球の古地図は東京大学の「15世紀の日本図・琉球図デジタルアーカイブ」で見ることができます。

- 1531-1623年 — おもろさうし ... 首里王府により編纂された歌集
- 1648年 — 琉球神道記 ... 日本の僧・袋中が記した書物
- 1650年 — 中山世鑑 ... 羽地朝秀による琉球国初の歴史書
- 1701年 — 中山世譜 ... 蔡鐸、蔡温による琉球国の歴史書
- 1711年 — 混効験集 ... 琉球国が編纂させた最古の辞典
- 1713年 — 琉球国由来記 ... 琉球国が編纂させた地誌
- 1745年 — 球陽 ... 琉球国の官僚・鄭秉哲らにより編纂された歴史書



## 4-4

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 伝承から歴史へ

辺戸大川の清らかな水、  
義本王の伝承、樹齢300年とも言われる美しい松並木。  
辺戸には、首里と繋がる歴史が幾重にも重なり、  
そのしるしを今に残している。



## 辺戸大川のお水取り

辺戸集落のそばには辺戸大川(ウッカー)の清らかな水が流れています。『琉球国由来記』(1713年)によると、旧暦12月に王府の使者がこの川を訪れ、国王や聞得大君の長寿と国の繁栄を祈る「お水取り」が行われました。この若水は首里まで運ばれ、元旦の首里城内で清めの儀式「お水撫で(ウビーナディー)」に用いられました。



ぎ ほん おう  
義本 王の墓

辺戸には「義本 王の墓」と伝えられる史跡があります。義本 王は13世紀頃に琉球国の王位についたとされており、即位の後に飢饉や疫病が起きたため、これを自分の不徳として英祖に譲位し、のちに北部へ逃れて辺戸で没したとされています。この物語には諸説あるほか、義本 王の墓とされる場所は県内に複数あり、実在の人物であるかを含め、はっきりしません。辺戸の佐久間家には義本 王が仮住まいしたと伝えられています。

史実は未だ謎ですが、神話の世界と琉球国の歴史をつなげる、伝承と歴史の境目に横たわる物語です。



修復調査で現れたもの

近年のこの墓の修復調査では、大きな陶棺と約26体の人骨が見つかり、そのうちの5点を年代測定したところ約400～150年前の数値が確認されました。250年間もの幅広い年代の骨が合葬されていたことが明らかとなり、残りの骨には義本 王の時代と合致するものが含まれているのではと期待されています。

さい おん まつ  
蔡温 松

蔡温は18世紀に琉球国の三司官（行政の最高職）を務めた人物で、農業、林業、治水などの政策を通して近世の国づくりを行いました。

蔡温は、家屋や船の建築材と薪としての材木需要に対する森林の持続的利用のため、また台風から集落や田畑を守る防風林・抱護林として、植林を奨励しました。当時植えられたと伝えられるリュウキュウマツは「蔡温松」と呼ばれ、かつては県内各地に松並木が見られましたが、戦争などで多くが失われました。辺戸の松並木には樹齢150～300年とも言われる松が残されており、辺戸蔡温松並木保全公園となっています。



## 4-5

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 暮らしのための祈り

安須森が国の安寧を祈る聖地である一方、  
辺戸の暮らしには豊穡や健康を願うさまざまな祈りが息づいてきた。  
現在は各家庭での祈りにその心が残されている。



## 辺戸の祭祀ウンジャミ

集落をあげて行われる大きな祭事のひとつがウンジャミ（海神祭）です。1970年頃には、ノロを含めおよそ15人もの神人（カミンチュ）が祭事を担い、ノロ（琉球王国の制度のもとで任命され、地域の祭祀を司った女性の祭祀者）を中心に集落の祈りが執り行われていました。

シヌグは男、ウンジャミは女の祭事と言われ、それぞれが集落の祈りを支えていました。

ウンジャミのはじめには、神人たちが根屋であるシバにこもり、集落の無事や発展を祈願します。こうした祭事は4日間にわたって続きました。

## 日々の祈り

日々の暮らしを見守る存在として、まず挙げられるのがご先祖様です。行事はすべて旧暦で、毎月一日(新月)と十五日(満月)の祈りや、墓前で行う「清明(シーミー)祭」でご先祖様への感謝の祈りは欠かせません。辺戸では、二月と五、六月に豊穡を願う「ウマチー」や、八月に屋敷を清め、

魔除けを行う「シバサシ」が今も各家庭で続けられています。そうした暮らしの中で、人々は安須森を「あしむり」あるいは「黄金森(くがにむい)」と呼び、心のよりどころとして親しんできました。この感覚は、安須森を見上げて暮らしてきた辺戸の人ならではのものです。



神屋(神を祀る場所)を改築した際の、根家(ニーヤ)  
(集落で最初に暮らし始めた先祖を祀った家)での御願(ウガン)(1978年)

### ウンジャミの厄払い

祭りの期間中、神人たちは白装束に身を包み、六尺の棒を持って集落の各家庭を巡ります。「エークエーアギーサミ」と唱えながら棒で戸を叩き、厄払いを行いました。その際、各家庭では雨戸を閉め、家の外に出て祭事が終わるのを待つ習わしがありました。病人であっても外に出て、決して神人の姿を見てはいけないとされるほど、厳格に守られていたといえます。

今では神人は不在となり、祭りは次第に簡素化されていきました。内容の多くが省かれ、かつてのような形でのウンジャミは行われなくなっています。

## 集落に暮らすKさんの日課

日々の祈りの中で、  
安須森は今も辺戸の暮らしを  
静かに見守っています。



根家にて、辺戸の女性たちが白太鼓(ウシデーク)練習の休憩中  
(1960年代前半頃)

Kさんは、朝6時になると自然と目が覚めます。7時になると、温かいお茶を仏壇に供え、さらにウッドデッキのカウンターにも一杯のお茶を置きます。そこは、亡くなったお母さんの存在をいつも感じる場所だそうです。

目の前に見える「黄金森(くがにむい)」を眺めながら、いつも自分のことを心配してくれていたお母さんを想うひと時を大切にしています。

自宅で営んでいるカフェのランチ営業を終えると、翌日に提供する野草を採りに山へ入ります。その際、山の前で自分の名前と住所を伝え、「これから野草を摘まさせていただきます。マジムン(魔物)やハブ、虫からどうぞ守ってください」と祈ります。そして山を出るときには、山の恵みへの感謝を伝えます。

## 4-6

辺戸の魅力伝えるストーリー

# 近代以降の辺戸

辺戸上原と宜名真を結ぶ道と土地の歴史は、

先人たちの知恵と粘り強さの表れであり、人々の開拓精神と希望の歴史でもある。



茅打バンタ近くの「門道」

## 戻る道・イラフ道

戦前まで、細く急峻な山道しかないこの地で主要な交通手段は船でした。宜名真の集落と、辺戸上原と呼ばれる茅打バンタの北側に広がる平坦な高台を結ぶ道に「戻る道」と呼ばれた場所があります。往来の困難な険しい崖地で、岩の裂け目に打ち込まれた杭や木の根を頼りに一人ずつしか登り下りができず、「向こうから人が来たらどちらかが戻って道を譲る」という場所でした。

宜名真は土地が狭隘で、辺戸上原へは崖道の険しさで開墾が捗らず、集落は貧しいままでした。大正元(1912)年、辺戸尋常小学校の校長に赴任

した当山正堅先生は、宜名真の人々が貧しく学校にこない子どもが多いことから、辺戸上原の開墾のために石灰岩の裂け目を広げる工事を計画。宜名真住民の努力により道が広げられて人や牛馬が通れるようになり、開墾も進みました。茅打バンタ近くの「門道」の岩に、今もこの道の険しさが感じられます。

現在は宜名真と辺戸上原を結ぶ村道がありますが、「戻る道」は当時使われていた「イラフ道」という旧道にあったと考えられ、石を積み上げて作られたイラフ道の遺構が今も残されています。

## 幻の開拓事業



沖縄県公文書館所蔵

戦後の辺戸上原には幻となった開拓事業があります。谷を堰き止めてダムを作り(1956年)、水が乏しいこの地に水を引いて水田を作ること、その開拓に連動して先に小学校を移し(1952年)、辺戸と宜名真の住民300戸を移転させ、県内初の水力発電所(1961年)を置いてモデル農村を作るといったものでした。しかし、漁業が生業の宜名真の人々にとって高台への移転は難しく、防風林が満



沖縄県公文書館所蔵

足でない辺戸上原は冬の北風で塩害が発生しました。また、完成した水力発電所は水不足で止まり、12kmもの長さに建設された用水路は一部が台風(1966年)に耐えられませんでした。結果的に開拓事業はうまくいきませんでした。これらは、変化しなければ地域の発展はない、という開拓者精神の現れといえます。

## 辺戸岬と復帰運動

沖縄島の最北にあり、年間40万人もの人が訪れる辺戸岬。ダイナミックで美しい景観で知られると同時に、沖縄の人々にとっては、祖国復帰運動の記憶の地でもあります。戦後、米軍による占領下の沖縄では、奄美群島が1953年に復帰を果たした際、与論島と辺戸岬を隔てる北緯27度線が「国境」となったのです。

沖縄では祖国復帰運動が盛んになり、双方から国境の海へ船を出して27度線上で船を接し、握手し合う海上集会や、復帰を願い与論島と辺戸岬で篝火を焚く運動が行われました。沖縄の本土復帰は1972年。米軍基地の多くがそのまま残り、辺戸岬に立つ「祖国復帰闘争碑」には復帰をめぐる人々の複雑な思いが刻まれています。



沖縄県公文書館所蔵



沖縄県公文書館所蔵

## 4-7

辺戸の魅力を伝えるストーリー

# 自然に抱かれた暮らし

畑の実り、森の資源、川や海の恵み。かつての辺戸の暮らしは素朴で厳しかったが、今では自然の豊かさが貴重な財産となり、未来に残すべき価値と魅力を与えている。



沖縄県公文書館所蔵

## くらしと食事

辺戸の暮らしを支える基本は農業です。水が引かれてからは稲作、その後サトウキビに転換されました。さらに、川ではウナギやエビを取り、海では宇座浜のイノーで魚を釣ったり潮干狩りをしたりといった自然の恵みもありました。

集落の家々には囲炉裏があり、毎日の食事はジュシーメー（雑炊ご飯）。具は畑でとれるカンダバー（サツマイモの葉）、シブイ（冬瓜）、チデークニ（人参）、チンヌク（里芋）、チンクワー（南瓜）など。素朴な食事ですが、家族で囲んで美味しく食べるのが、日々の何よりの幸せでした。



## 収入源は薪

昔の辺戸の収入源は、森林資源である薪(タムン)でした。薪は程よい長さに切り出し、竹を割いて輪を作った中に薪を差し込んでいって束にします。それをトラックに乗せて那覇まで売りに行きました。現金収入を得たら子どものためのものなどを買って、2~3日あるいは4~5日かけて戻ってくるので、子ども達は帰ってくるのが待ち遠しかったそうです。



沖縄県公文書館所蔵

## 共同売店

辺戸で唯一のお店は、区民の出資で作る共同売店。共同売店は、注文があれば物を取り寄せ、薪を売りに出すのに誰がいくつと勘定して取りまとめるなど、集落と外との物やお金のやり取りを行う場所でした。とはいえ、売店には決して物が豊富にあったわけではなく、復帰前までは石鹸一つ、飴玉一つずつ売のような形でした。現在、辺戸区では区長が共同売店を担い、今も区民が立ち寄り声を掛け合う交流の場になっています。



## 未来に繋げる観光と保全



2007年

安須森では戦後、建設資材として石灰岩の採掘が行われました。それによる聖域や自然環境の変化を危惧した民間企業が、一部の土地を買い取り、現在は観光活用しながら古来の聖域と自然環境の保全を目指すエリアになっています。しかし安須森や辺戸岬には、昔からの伝承や信仰を受け継ぐ御嶽や拝所と、他所から



かつての姿

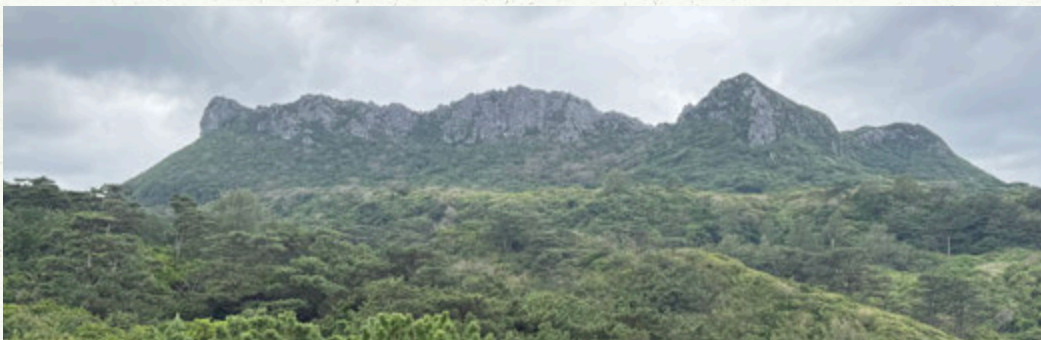
沖縄県公文書館所蔵

持ち込まれ地域に無断で立てられた「拝所」が混在しています。琉球国と繋がる伝承や歴史文化を持ち、ダイナミックな自然が残されている辺戸は、沖縄県民の想いの源とも言える場所です。人々に開かれた場所でありつつ、本来の姿がしっかりと残されるよう、来訪者の理解と協力を得ていくことが求められています。

### みんなで守った山

辺戸にはごみ処分場計画から山を守った歴史があります。1999年、村から新たな一般廃棄物最終処分場として辺戸の山が候補地とされた際、区はこれに反対し、環境権や入会権をもとに建設差し止め訴訟が起こされました。2001年、着工の日には森の木を切らせまいと区民が建設予定地に座り込みをし、おばあちが木にしがみついで抵抗しました。その後、工事禁止の仮処分決定が出され、処分場計画は宇嘉区への建設に変更されました。

辺戸の人々にとって、山は材木や薪の資源を得る大切な場所であり、暮らしを支え自分たちを生かしてくれる場所でした。そんな山をごみで汚してはいけないという強い思いが区民を動かしたのです。また、自分たちもごみを出す側として、当時の区民が環境青年団を作り、ごみ減量にも取り組みました。こうした出来事が、今の辺戸の森と環境を守る意識につながっています。



# 第5章

## 辺戸エリアで体験してほしい18のこと

### 望ましい来訪者体験

- 辺戸岬や安須森のダイナミックな風景を生み出した遥かな時間を感じる
- 周囲のやんばるとは一味違う、石灰岩にソテツやガジュマルが育つ自然を歩く
- ヤンバルクイナの声聞き、森の生きものたちとの近さを感じる
- 星窟伝説の残る地から美しい星空を眺める
- 宇座浜のイノーの自然を楽しむ
- アスムイハイクスの自然と神秘的な空間を感じる
- 聖地のエネルギーと清らかな空気で心身を整える
- 聖地で本来の祈りの形を体験し、琉球の精神文化のあり方を考える
- 琉球開闢の神話の地に立ち、琉球国と辺戸との深いつながりを感じる
- 大川の清らかな水を育む辺戸の森を体感する
- 伝説と歴史の狭間にある義本王の時代に思いを馳せる
- 蔡温松の並木道を歩いて辺戸の原風景を感じる
- 辺戸の祭祀を体験して繁栄・豊作・安全の神々にあやかる
- 崖道の険しさと、その困難を克服してきた先人の苦勞を感じる
- 辺戸岬に立ち、復帰の夢を見た人々に思いを寄せる
- 地元の野菜やハーブの恵みを味わう
- 共同売店に立ち寄り、地域の人々と触れ合う
- 辺戸集落でのんびりした時間を過ごしてリフレッシュする

# 第6章

## 地域の情報リスト

### <辺戸区>

辺戸地区公民館 国頭村辺戸51-3 0980-41-8502

辺戸共同売店 国頭村辺戸36 0980-41-8440

### <観光・体験>

辺戸岬観光案内所 国頭村辺戸973-5 0980-43-0977 <https://hedomisaki-okinawa.com>

アスムイハイクス 国頭村宜名真1241 0980-41-8117 <https://asuui.com/>

アスムイの郷 楽園 国頭村字辺戸41 090-9582-4939



### <食事>

ふしくぶカフェ 国頭村辺戸973-5-2F 0980-43-0977 <https://www.fushikubu-cafe.com>

かっかあカフェ 国頭村辺戸514 080-6495-7888



### <宿泊>

みやぐわーさ〜 国頭村辺戸41 090-9582-4939

やんばるホテル南溟森室 国頭村謝敷161 050-8884-4992 <https://yambaru.co.jp>



### <国頭村>

一般社団法人 国頭村観光協会/国頭村観光案内所 国頭村字奥間1569-1 0980-41-2420

<https://kunigami-kanko.com>

道の駅ゆいゆい国頭/よっしゃあ!国頭体験室 国頭村字奥間1605 0980-41-5555

<https://www.yuiyui-k.jp>

国頭村民ふれあいセンター図書室 国頭村辺土名121 0980-41-2101



### <環境省>

やんばる野生生物保護センター ウフギー自然館 国頭村比地263-1 0980-50-1025

<https://www.ufugi-yambaru.com>

※R8年 夏に「やんばる世界遺産センター」としてリニューアルオープン予定。



# 第7章

## 参考文献

- 国頭村教育委員会, 2017. 『くんじゃんなび 第1号 宜名真×辺戸』  
関連ストーリー: 2-2(p15)、3-1(p2-3)、3-2(p4-5)、4-2(p8-14)、4-3(p16-17)、6-1(p18-19)
- 国頭村役場, 2016. 『くんじゃん -国頭村近現代のあゆみ-』  
関連ストーリー: 2-2(p64-74)、2-2, 4-1(p549-550)、4-3(p41-42)、6-1(p259-260)、  
6-2(p262-263)、7-3(p388-395)、7-4(p81-83)
- 北国小学校閉校式実行委員会, 2023. 『国頭村立北国小学校閉校記念誌』  
関連ストーリー: 3-3(p56)
- 国頭村役場, 2016. 『資料編 くんじゃん -国頭村近現代のあゆみ-』  
関連ストーリー: 5-1, 5-2(p58, p76)
- 島袋正敏, 1989. 『沖縄の豚と山羊』ひるぎ社  
関連ストーリー: 5-2
- 島袋源七, 1929. 『山原の土俗』郷土研究社  
関連ストーリー: 5-2(p3-8, p40-41)
- 浦島悦子, 2002. 『一坪反戦通信 第134号 やんばる便り 23』  
関連ストーリー: コラム
- 琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ <https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp>  
関連ストーリー: コラム
- 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp>  
関連ストーリー: コラム
- 15世紀の日本図・琉球図デジタルアーカイブ  
<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/nihonzu/>  
関連ストーリー: コラム
- 沖縄県公文書館  
<https://www.archives.pref.okinawa.jp>

## あとがき

2019年、姉とともに、祖母が亡くなり空き家となっていた母の実家、大工だった祖父が建てた「民宿辺戸」を改築し、宿を営む計画を立てた。その後、この家で祀られてきたトトメー（位牌）を永代供養することとなった。

沖縄の家庭においてトトメーは、単に故人を祀るものではなく、家族の歴史そのものであり、世代を超えて受け継がれ、家族の絆を深める祈りの象徴でもある。正直なところ、言葉にできない寂しさがあった。

辺戸で宿を営もうと決めてから、集落の方々や地域の事業者、考古学者の先生や、時にはアスムイを拝みに訪れるユタ（ここでは、「土地の神様との連絡係」という方が伝わると思う）と呼ばれる方々とともに、地域を歩き回った。フィールドワークを重ねるたびに、忘れられかけていた拝所や家族の歴史に出会った。

ムラ墓を整備した際には、草木の伐採を伴う大がかりな作業の中で、ノロ墓や倒れた十字架のある拝所を見つけた。見通しが開けた墓地から望む辺戸岬と宇座浜の海岸線は、海の向こうの桃源郷ニライカナイを思わせるほど美しかった。そのとき、ここに墓があるから特別なのではなく、この場所が特別だからこそ大切な人を祀ったのではないかと感じた。

辺戸を歩き続けるうちに、この土地との縁が少しずつ結び直されていくのを感じている。集落の魅力に触れるなかで、かつて抱いていた寂しさは、次第に希望へと変わっていった。2026年1月には、宿も開業することができた。

本インタープリテーション全体計画は、私たちが仲間とともに重ねてきた歩みの一つの区切りである。集落の方々や専門家、志を同じくする仲間たちと対話を重ね、現地を歩き、知恵を出し合いながら形にしてきた。

これをきっかけに、辺戸という地域の価値と魅力がより多くの人に伝わり、大切にされ、できればこの地で暮らす人が増えていくよう、これからも仲間とともに歩みを進めていきたい。

辺戸の人々が見上げてきた安須森は、今日も変わらず私たちを静かに見守っている。

辺戸エリアインタープリテーション全体計画づくり

地域チームリーダー

仲本いつ美

辺戸ストーリーブック

## 見上げれば神宿る山 麓に息づく辺戸の暮らし

やんばる国立公園インタープリテーション全体計画 国頭村編

- 発行 環境省沖縄奄美自然環境事務所
- 協力 石原 昌春／遠藤 裕樹／喜瀬 元磯／金城 恒夫／  
平良 克己／服部 貴昭／堀内 悟／吉田 孝幸／国頭村  
ゆんたくワークショップにご参加いただいた皆さま
- 国頭村 仲本 いつ美／赤嶺 信哉／大城 和也／大城 良太／平良 太／高橋 巧／  
地域チーム 永井 良太／宮城 哲也／山城 岩夫
- 写真提供 岩崎 誠／鹿谷 麻夕／平良 太／山城 岩夫／山城 廉太／(一財)沖縄県環境科学センター
- イラストレーター 鹿谷 麻夕(辺戸歴史絵巻)
- 製作 やんばる国立公園インタープリテーション全体計画編集チーム
- 製作協力・監修 一般社団法人 日本インタープリテーション協会